
黒の少女！？

服部大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の少女!?

【Nコード】

N0378A

【作者名】

服部大好き

【あらすじ】

ある日、アガサ博士は玄関でたおれている少女をみつけた。その少女は、哀のことを知っているというのだった。さあ、いったいこの子は誰なのだろう？

ずぶぬれの女の子（前書き）

アガサ博士は見つけた．．．小学生の女の子を。

ずぶぬれの女の子

雨が降る中アガサ博士は、家に帰ってきた。

「雨が良く降るの．．．んっ？．．．あれは、女の子？」

なんと、家の玄関の前で女の子が倒れていたのだ．．．それも服がぶかぶかな。

「この子は．．．まさか！」

（アガサ博士の家）

「うっ、うくん．．．ここは？」

「おお！気が付いたか！！」

その少女は、髪の色が黒色で、肌の色がすこし黒い女の子だった。

「うくん」と言いながら起き上がり哀の顔を見ると、「へっ？」と言いいっしゅん固まったのだ。

と思うといきなり、

「シェリー！！？」と叫んだのだった．．．どうやら知りあいらしい。

「哀くんこの子を知っているのかい？」

「ええ、たぶん知っていると思うは、あなた．．．組織から逃げ出してきたわね？」

「そうよシェリー、私は故杏よ、おぼえてる？」

「もちろん覚えているは、あなたぐらいだものね、本名で呼ばれていたのは。」

「おいおい哀くん、なんのことだか説明してくれ！」

ここで説明を入れますと．．．

どうやら、『故杏』は哀ちゃんと組織の中で中が良かったようだ．．．

そしてこの子も、例の薬を飲んだようだ．．．

「それで？これからどうするつもり。」

「とにかく、家族を探さないと．．．」

「そういえば、名字なんていうの？」

「名字は、『服部』よ。」

「え？」

二人ともまさか．．．
 と思っていた。

けれども、髪型も少し似ている。肌の色も。．．．

「ハックション」

「どしたん？平次風邪でもひいたんちゃう？」

そのとき等の本人がくしゃみをしていたとは誰も思っていなかったのだ……

ずぶぬれの女の子（後書き）

（作者より）

話がわかりにくいですかね？

急いで書いたんで短いと思いますがすいません。

質問ぜめ．．．（前書き）

「「え？」」

そのまま二人は2分．．．いや、3、4分は固まっていただろう。

質問ぜめ・・・

「ちょっとまって！だって『あの人』に兄弟は・・・。」

「えっ！何々心当たりがあるの？」

『あの人』と言うのは、この『故杏』にそっくりな高校2年生の少年のことである。

「でも、たしかに似てるかも・・・色黒な所とか、髪型も・・・。」

ピンポン、ピンポン

「おおい、博士来たぞ〜？」

「おお新一！来たか！！」

「えっ？しっ新一！？」

そのとき故杏は、毒薬を飲まされた少年を思い出した。

「あなた、間違われるかもね（笑）」

「へっ？」

（間違われるって・・・誰と！？）

「んっ？奥に誰かいるのか？」

「さすが探偵さんね、奥にもう1人いるわよ（笑）」

（？）

そして、新一（コナンです・・・）が故杏のいる部屋へ入ると・・・！

「えっ？はっ服部？何でお前が？？お前も小さくなったのか！？」

コナンは、ある人物と故杏を間違えたようだ・・・

「えっ？えっと・・・たしかに私は【服部】って言う名字だけど・・・あなたと直接会ったのは初めてなんだけど・・・。」

「工藤くん、この子まず女の子よ、確かにこの子も薬を飲んで小さくなった人の1人だけど・・・。」

「へっ？服部じゃねーのか？でも薬の被害って・・・！」

まさか、と新一は思った。

「私は、組織から逃げてきたの、それでとりあえず家族に会って事情を説明したいんだけど。」

「そこで今からちよつと質問をしたいから、工藤くんも手伝って、あとこの子の名前は『服部故杏』よ。」

「へっ？し、質問？私に？」

「あなた意外にいる？」

そして質問ぜめが始まった・・・

「それじゃあ・・・あなたに兄はいる？」

「いるけど・・・何で知ってるの！？」

「それじゃあ次。」

（私の質問無視！？）

「あなた、大阪出身？」

「まあ、そうだけど・・・」

（何でこんな事を？）

「それなら次俺から、兄の名前は『服部平次』か？」

「なっ、何で知ってるの！」

「てことは・・・」「もしかして・・・」

「ハックション、ハクション」

「・・・やっぱ平次風邪ちゃうん？」

「ちやうちやう、誰か俺の噂してんねん、きつと!!！」

そのとき、東京では真実を追究するために3時間ほど質問ぜめにしていたとか。

質問ぜめ・・・（後書き）

～作者より～

うう～何か今回博士1回しか喋ってない・・・

私にとって博士はどうでもいいのか？

は～、博士好きな人ごめんなさい！！

しかも、故杏バリバリ標準語・・・次から関西弁になるかも・・・

これからよろしくお願いします。（あと故杏は読みこあんと言います）

く大阪へく（前書き）

（何回質問すれば気が済むんだろう．．．）
と、故杏は心の中で思っていた。

く大阪へく

「はあ、やっぱり本当に」

「『服部平次』の妹なのか」

（それ五回は言ってるんだけど）

「あ、あのさ私早く家族にあいたいんだけど・・・」

「そうね、じゃあ二人で大阪にいつてきたら？」

「灰原は行かないのか？・・・まあいいか、それじゃあ故杏のことなんて呼べばいいんだ？偽名要らないのか？」

「え！ああそっか、でも大丈夫とは思うんだけど・・・もともと組織でも私の名前呼んでた人っていないと思うんだよね。他の人にも名前知られてないし。」

「それなら大丈夫・・・だな。」

「私も工藤君のことなんて呼べばいいの？『コナン君』？」

「人がいるところではコナンって呼んでくれよ？服部と同じようには・・・」

「大丈夫だよ、まかせて！それじゃあ大阪へ行こう。」

く電車の中（大阪行き）く

「ねえねえ？」

「んっ？なに。」

「私って関西弁喋ったほうがいいのかな？もうすぐ大阪だし、」

「確かにそうだな、そういえば服部ってお前の事覚えてるのか？」

「たぶん・・・私がいなくなったの平次が小4のときだし」

「・・・お前何歳だ？」

「今14。」

「で、体は？」

「小5・・・かな？薬ちょっと変えた見たいだし、小1まで戻らないんだ。」

「じゃあいなくなったときと年齢違うんじゃない・・・」

「そういうこと♪」

「わかんねーじゃねーか・・・たぶん。」

そして、大阪につき服部平次の家へむかった。

　　平次の家

「ふゝ、やっと着いたゝ。」

「服部のやついるかな？」

ピンポーン、ピンポーン

「はいはゝい、今でるよゝ」

「この声・・・和葉ちゃんか。」

「???」

ガラララ、

「あれ、蘭ちゃんこの・・・何しにきたん？」

「あつ、ちょっと平次兄ちゃんに会いに来たんだ。」

「1人で？」

「ううん、この子もいっしょ。」

「ちょっと、なんでふるの!!」

「あれ、この子・・・」

「えつとあのその・・・」

（まさか知り合いだったのか!!）

（直接会った事ないって!!）

二人とも動揺していると・・・

「平次にそっくりや!!」

(ほっ)

なにも知らなかったのよかったと故杏は思うのだった。

「えっと、とりあえず平次兄ちゃんいる？」

「うん、おるよ、それやったら二階に上がったとき、なんか持ってくるから。」

「おおきに、お姉ちゃん。」

今のは、故杏が大阪弁を使ったのだ。

「あれ？その子大阪弁喋れるんか。うちは、『和葉』って言うねんよろしくな!」

「うん、よろしくな和葉姉ちゃん♪」

(なんかびみょーに子供言葉うまいぞ・・・こいつ。)

「ほんなら、またあとで。」

そして和葉は台所へむかった。

く大阪へく（後書き）

く作者よりく

作者「はくいそれならここから故杏といっしょにはなしていきまゝ
す♪」

故杏（テンション高すぎやあんだ．．．。）

作「なんかいった？」

故「特に言ってません。」

作「やっぱり博士出てこない．．．」

故「まあ、前のは、哀ちゃんたくさん出てたけどね」

故「で、これからどうなるか決めてるの？」

作「ウツ．．．」

故「あんま決まってるないな」

作「まあ、とりあえず読んでくださった皆さんありがとう！！」

故「これからもこのダメ作読んでな」

作「ひどいよ．．．故杏く。」

く大阪で!??く

タツタツタツ

と、階段をのぼる音が平次の耳に入った

(誰やろう?・・・和葉?)

彼には不思議で仕方なかっただろう、何しろ足音が二つしていたのだから。

ガチャ

と、扉の開く音と同時に目に入ったのは東で有名な高校生探偵(だが、体が小さいので理由を知らない人が見たら【江戸川コナン】だ、)と、その後ろにいる女の子だった。

平次「よお、工藤ひさし・・・」

コナン「なにがひさしぶりだ!!なんで兄弟がいるのに言わなかったんだ!」

言葉を全部言う前にさえぎられてしまったが早く質問に答えないと何か起こる気がしたのでとりあえず答えることにした。

平「兄弟って・・・お前聞かんかったやんけ。」

コ「・・・そりやそうだけど・・・でもなんで組織に関係してるかもしれないのに言わなかったんだ?」

平「それかって同じや、聞かんかったやんけ。」

コ「きかねーよ・・・『組織に関係のある兄弟いるか?』なんて。」

平「それで、その後ろにいる女の子だれや?」

コ「こいつがお前の妹らしいから連れてきたんだよ。」

故「らしいって・・・まだ信用してなかったの?」

平「ふーん、こいつがねーぜんぜんわからなかったは。」

コ(まっ、ぜんぜんあつてなかったんだからおぼえてねーよな)

故「そういえば、和葉ちゃん何か持ってくつていつてたっけ、えっと、和葉ちゃん手伝ってくるね、それと・・・いま父さんか母さんいる?。」

平「いるんちゃうんか、親父はともかくおかんはいると思うで。」
故「それなら二人でなんかてきとうに話でもしてて、それなら後で。」

これから、故杏の身に恐ろしい事が起ころうとはまだ誰もきずいて
いなかった・・・

く大阪で!?? (後書き)

く作者よりく

服部大好き「こんにちはく服部大好きでくす。」

故杏「こんにちはく助手の故杏でくす。」

故「なあなあ、私って関西弁喋ってる?」

服「うっ…… (汗)」

故「次は頑張れや」

服「あれ? 励ましてくれてんの?」

故「これからの作品にもちよっとは出してね♪」

服「反響よかったらね。」

故(私この作品だけかもしれないの?)

服「まあ、これからもがんばるんでよろしくねっ。」

故「私がんばるからね、一番最後の文章が引っかかるけど……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0378a/>

黒の少女！？

2010年12月30日09時59分発行